



おもすの森

発行
大本山 本門寺 根源
山務庁
富士宮市北山4965
電話 0544-58-1004

日蓮大聖人

御聖訓

『教機時国鈔』

(弘長二年二月十日)

譬(たと)えば農人(のうにん)の秋冬(あきふゆ)田を作るに種(たね)と地(ち)と人(ひと)の功劳(くろう)とは違(たが)わざれども、一分(いちぶ)も益(えき)無く還(かえ)つて損(そん)す。一段(たん)を作る者は少損(しょうそん)なり。一町二町等の者は大損(だいそん)なり。春夏耕作(はるなつこうさく)すれば上中下に随(したが)つて皆分分(ぶんぶん)に益(やく)有るがごとし。仏法もまたかくのごとし。時を知らずして法を弘めば、益(やく)無き上、還(かえ)つて悪道(あくどう)に墮(だ)するなり。

【現代語訳】

譬(たと)えば、農夫(のうぶ)が秋(あき)や冬(ふゆ)に田を耕(か)し、蒔(ま)く種(たね)と耕(か)す田(り)と農夫(のうぶ)の労働(ろうどん)は春夏(はるなつ)に行(い)うことと同じであつても、少しも収穫(とく)はなく、かえつて損(そん)をする。一反(いちぼ)耕作(か)した者は少しの損(そん)、一町二町(いちちうにちう)などを耕(か)した者は大損(だいそん)となる。春夏(はるなつ)に耕作(か)すれば、それぞれの田地(で)によつて皆(みな)それ相応(さうおう)の収穫(とく)を得ることが出来る。仏法(ぶつぽう)もまたこれと同じである。時(とき)を弁(わ)きま(え)ないで法(ぽう)を弘(ひろ)めると、その効果(こうか)がないうえに、かえつて悪道(あくどう)に墮落(だらく)することになる。

※参考・『日蓮聖人全集』

日蓮大聖人第七百四十三遠忌 御報恩会式

御建夜法要

11月12日(火) 18時30分より

法要後 奉納太鼓・法話(浦野弘正上人)

御正当法要

11月13日(水) 11時00分より

大聖人の御命日忌ですので、是非ご参拝ご焼香下さい

御会式について

お会式ってなに？

日蓮大聖人の御命日に営む法要のことを「お会式」と言います。古くは「御影講」「御命講」「報恩講」などとも呼ばれていたようです。

会式とは「法会の儀式」を略したもので、もともと仏教各宗に共通する語でありました。しかし、今日では専ら日蓮大聖人の御命日に営む法要のことを指しています。

いつ・どこで亡くなったの？

弘安五年（一二八二）十月十三日、武蔵国池上（現在の東京都大田区）の地で六十一年の御生涯を閉じられました。

日蓮大聖人は、五十六歳の建治三年（一二七七）頃から身体の不調に悩まされるようになり、度重なる法難に加えて、冬の厳

しい寒さ、食の貧しい日々は次第に日蓮大聖人の体力を奪い、体調は悪化していききました。

弘安五年九月八日、九年間過ごした身延の山を下り、湯治のため常陸国（現在の茨城県）へと向かわれました。九月十八日には武蔵国池上にある檀越池上宗仲の館（現在の 大坊本行寺）に立ち寄りしましたが、それ以降旅を続けることは出来ませんでした。

自身の臨終に近いことを覚った日蓮大聖人は、多くの弟子や信者に対して法華経・立正安国論をご講義なされました。さらに十月八日には日昭上人・日朗上人・日興上人・日向上人・日頂上人・日持上人の六名を本弟子と定め、自身滅後の弘教を託しました。

そして十月十三日辰の刻（午前八時頃）、門下読経の中、御入滅されました。その時大地が揺れ、桜の花が咲いたと伝えられています。お会式に桜を模した花

をお飾りする由来はここにあります。

同月十四日子の刻（午前0時頃）、葬送の儀が営まれました。これらの事は日興上人が同月十六日に記された『宗祖御遷化記録』という書より知ることが出来ます。

今日、私たちがお唱えする南無妙法蓮華経は、日蓮大聖人が身命を惜しまず、命をかけて弘められた大切な教えです。

尚、当山では、月遅れの十一月十三日に御報恩の法要を営んでおります。是非、御生御影尊にお参り下さい。



『提灯奉納』募集の御案内

當山では、提灯を奉納して頂きました檀信徒各家の家運隆昌を御祈念させて頂いており、提灯奉納の新規御申込みにつき、下記の通りの御案内および御協力を御願ひする次第でございます。尚、提灯の奉納は原則として一年毎に更新して頂くということで御願ひしております。既に御奉納頂きました方々も、本年も是非とも提灯奉納を御更新頂けますよう御願ひ申し上げます。知人・縁者の方々にも御勧め頂きましたら幸甚です。

奉納料	新規・更新共に	寺院	10,000円	檀信徒	5,000円
申込み方法	同封済みの振替用紙かお電話にて御申込み下さい				
最終締切	本年 11月9日（新規の方は歳末に掲げます）				
提灯のサイズ	1、寺院用 尺二寸胴長 2、檀信徒用 尺胴長				

御会式提灯にもまだ間に合います！



御奉納頂いた提灯は、當山御会式並びに新年祝禱会（元旦前後一週間）の際に、境内に飾ります。ぜひ当日は當山に御参拝頂き、御覧頂ければと存じます。御不明な点は、本門寺山務庁まで御問い合わせ下さい。 電話：0544-58-1004

法華經に学ぶ 第二十七回

布教伝道部 浦野 弘正

阿闍世王の帰依

あじやせおう
びんばしやらおう

前回は、頻婆娑羅王とお釈迦様の関係、阿闍世王が頻婆娑羅王を殺して王位に就いたことをお話ししたところで終わりました。なぜ阿闍世王は父を殺さなければならなかったのか、また、どのような経緯でお釈迦様に帰依されたのかのお話から始めます。

頻婆娑羅王と韋提希夫人の間にはなかなか子供が生まれなかつたといひ、王は様々な仙人に相談します。その内の一人が、「私が亡くなつたのち、きつと貴方たちの下に生まれ変わるであろう、それまでお待ちなさい」と進言されますが、王はそれを待ちきれず、その仙人を殺害してしまいます。

その仙人は「生まれ変わったならばきつとあなた方を呪うであろう」と言い残してこの世を去ります。

しばらくして二人の間に生まれたのが阿闍世王子でした。頻婆娑羅王は仙人の最期の言葉を恐れ、幾度も阿闍世を殺そうとしますが、ことごとく失敗に終わります。

そのうちに成長した阿闍世は、幾度となく自身を殺そうとしてきた父王を幽閉してしまします。お釈迦様に反逆して、新教団を作ろうとしていた提婆達多(お釈迦様の従弟)にそのかされたためとも言われています。幽閉されてしまった父王に対し、母が身体に蜜を塗って施していた事を知ると、母までも幽閉

してしまいました。ついに父王は餓死しますが、後に阿闍世はその罪を悔い、激しい頭痛を感じようになります。医者でもあつた者婆大臣の勧めでお釈迦様に相談し、お釈迦様の力でその頭痛が治まつたので、仏教に帰依して仏教教団を支援するようになったといひます。この阿闍世王も、百千のお供を従えてお釈迦様のお説法を待つています。

説法を待つ聴聞衆

以上の人々が、それぞれお釈迦様の前に出ては、お釈迦様の足を礼拝して、自分の席に座り、お説法を待つていました。古代インドでは「尊者の足元にひざまずき、頭を地に付け、両手で相手の足先を手にとって額で触れること」が「最高の敬礼方法」とされていたためです。御経文では、「各礼仏足 退坐一面」「おのおの 仏足を礼して 退いて一面に坐しぬ」とあります。

礼仏足と頂足の所作

皆さんも、私たち僧侶が法要で、本堂に昇堂して着座した直後、頭を床につけ、両手を開いて耳の横で真っ直ぐ挙げてゐるのを、一度や二度はご覧になつたことがあると思ひます。これを「伏拝」「頂足」といひ、特に頂足はこの「仏足を礼して」を基にした所作です。法要を営むにあたって、仏さま方にお出まし頂き、見守つて頂きたい、という気持ちを表した作法です。

別序の始まり〜此土六瑞

靈鷲山の山中では、かくも多くの人がお釈迦様のお説法を待つていますが、まだお釈迦様は語られませんが、次に語られるのは、「法華經が説かれる【いわれ】」です。『開結』では五九頁から、『岩波(上)』では一八頁からです。

お釈迦様が一番大事な教えである「法華經」を説くにあつて、その前に、この世界に不思議なことが六つ起つた様子が語られます。めでたいしや不思議なことが起る予兆を「瑞相」といひますが、「此の土(世界)で起つた六つの瑞相」で「此土六瑞」といひます。御経文で語られる順番に、①説法瑞②入定瑞③雨華瑞④地動瑞⑤衆喜瑞⑥放光瑞の六つです。

此土六瑞〜①説法瑞

お釈迦様はまだ法華經のお説法を始めていません。なぜなら、その前に『無量義經』の教えを説かれたからです。本文では「爾時世尊 四衆圍繞 供養恭敬 尊重讚歎 為諸菩薩 説大乘經 名無量義 教菩薩法 佛所護念」「爾の時に世尊、四衆に圍繞せられ、供養・恭敬・尊重・讚歎せられて、諸の菩薩の為に大乘經の無量義・教菩薩法・仏所護念と名づくるを説きたもう。」の部分にあたります。

(続く)

『本門要軌』を読む 第二十六回

布教伝道部執事 阿部 和正

此処まで助行（読誦）について問うてまいりました。諸論ありますが行き着く処は讚嘆文（『御義口伝』）「品品の初にも五字を題し、終にも五字を以て結し、前後中間、南無妙法蓮華經の七字也。末法弘通の要法は唯此の一段に之有る也。此等の心を失て、要法に結ばずんば、末法弘通の法には不足の者也。」の通り、久遠本佛が教示された法華經一部の趣旨は、一文一句総てが南無妙法蓮華經の御題目に帰結する意。末法の衆生救済の為、法華經一部を御題目の要法に結び、本化上行菩薩の応現・宗祖日蓮大聖人に付囑された意。此等の心を忘れて、御題目の唱題を軽んじ、専ら一部の読誦に重きを置いて専念する事を謹しむべき事。文の意ではないかと存じます。

六 御聖訓 四十七頁

これより御聖訓に入ります。聖訓とは「聖人の訓戒。天子の訓示。みことのり。聖諭。勅諭。」（『日本国語大辞典』）とあり、此処では宗祖の訓戒・教訓という意になります。所謂宗祖の遺された文書類の総称を、日蓮門下では御遺文あるいは御書、祖書、聖教、御妙判等と呼称しております。ちなみに最も古くからの呼称は御書のように、當門流に於ても同様に「大聖人

御筆の大曼荼羅已下自筆の御書等」（『日代置状』宗学全書一三九頁）、「御書云く佛滅後」（『御伝土代』宗学全書二四二頁）、「聖人御書の事付十一箇條」（『富士一跡門徒存知事』宗学全書一二一頁）等、御書の文字が確認できます。これらの宗祖の遺訓を法要中に拝読する所作を、法要次第では聖訓あるいは祖訓、拝訓などと呼びます。日蓮宗の行法を十項目に示した「十正修」に於て祖訓は、讚歎「読経の前後には読経唱題の功德を讚歎し、以て敬信を生ずべきである。運想「運想とは思惟觀念なり。（略）読誦の意を結し、唱題中の淨心を起こし発すべし。故に、読誦の終り唱題の始めに、別して運想を用ゆべきなり。」（『宗定日蓮宗法要式』二六九―二七二頁）と、讚嘆文や運想文として適宜に用いるべきとされています。今日の如く式中に宗祖の遺文を拝読する形式は、明治に入り田中智学居士の定めた『妙行正軌』に始まり、やがて日蓮門下に於てもこれに倣い読誦の次に拝読するようになった様です。「御経文だけでは必ずしも御題目の修行を助けるといふようには文上に説かれていない。（略）末法の衆生のためには、本化上行大菩薩という大導師が遣はされてあるから、その依師によらなければ正しい修行の方軌はわからないのである。」（『妙行正軌』五一―五二）と説かれます。第四十七世日幹貫首貌下は「宗祖の遺訓は先師

も末法の法華經であるといわれたように、宗祖大聖人色読体験の聖録であるから、妙行の際には必ず拝読すべきである。」（『妙行聖典』一七六頁）と教示され、第四十八世日幹貫首貌下も「日興上人によつて創始せられた富士門の流れは（略）生御影直参・三大秘法実現の信仰に支えられて今に至っている。その純正にして別頭な教を誇る伝統は、日蓮聖人の『開目・觀心兩抄』を頂点とした『立正・撰時・報恩』の主要教判五大部と、『四信五品・下山・本尊問答』の三抄など、宗義修行に関わる御書を基盤として培われてきた。」（『日興上人の風光』一一六頁）と説示されております。ちなみに日幹貫首貌下は『妙行聖典』中に宗祖の遺文全篇中から、妙行に肝要となる御文八十九抄を撰び挙げられています。又日幹貫首貌下も『抄出御聖訓集』を作成され、宗祖の御書二十一抄に、日興上人の聖文一抄と元政上人の御文一抄を集成されています。『本門要軌』と併せて日々の修行に御活用ください。

宗祖の御書は「當門流に於ては御書を心に染め、極理を師伝して若し間有らば台家を聞く可き事。」（『日興遺誠置文』宗学全書一三二頁）と、開山上人より今日まで大変に重要視されてきたことを知りうるのです。

（続く）

蓮華山本源寺 入退寺式

令和六年十月四日、当山に本源寺(市内白糸)第十八世新任職・本間健司上人と共に総代三名の方々がご登山致しました。



旭貫首猊下より継承御本尊の授与

本堂に於いて午前十時から、旭貫首猊下より、本間健司上人に対して、継承御本尊授与式が行われました。

式中に健司

上人は、生御影尊様に本源寺入寺のご報告と広宣流布に邁進すると共に、本山並びに自坊護山御給仕の誓いを立てられました。

また翌五日には、午後二時より、本源寺本堂に於いて、法灯継承の入退寺式が行われました。第十七世本間光信上人より過去帳の授与が行われ、改めて貫首猊下より継承御本尊が本源寺本堂に奉奠されました。



挨拶をされる新任職・本間健司上人(写真右)

謝辞では、前任職光信上人より「本年は本山第十一世・本源寺御開山日健上人の正当四百遠忌にあたり、ここを節目として後進に法灯を譲りたいと考えてまいりました。今後も仏祖三宝への御給仕を精進してまいりたい」との挨拶が述べられました。健司上人からは、「住職としての自覚を持ち精進してまいります。引き続き檀信徒の皆様のご支援とご協力をお願い致します」と感謝の挨拶が述べられ、無事に式典が修了致しました。

重須婦人会 研修参拝

令和六年十月十八日、重須婦人会の皆様と共に、本山の末寺である本能寺様(沼津市)、有縁本山實成寺様(伊豆市)へ研修参拝して参りました。

本能寺(保田義彰住職)様は当日御会式にあたり、本堂前には万灯(御会式桜)が飾られて檀信徒の皆様を迎え入れる準備がなされておりました。

本山實成寺(田中日芳猊下)様より、本門寺と實成寺とは深いご縁で結ばれており、日興上人のお弟子の日尊上人の御開山であるとの縁起のお話



本山實成寺貫首田中猊下よりお迎え頂きました(前列中央)



沼津本能寺本堂前にて、保田住職(前列中央)と共に重須婦人会の記念写真

を頂戴しました。当山との繋がりを再認識することが出来る有意義な時間を過ごすことが出来ました。ご多忙の中、参拝させていただきました本能寺様、實成寺様には厚く御礼申し上げます。

重須会研修会

十月十日、本門寺方丈において、重須会研修会が行われました。講師には、本誌連載担当でもある当山布教伝道部執事・山梨県正法寺住職、阿部和正上人をお迎えしました。「重須における諸天善神信仰」を講



題として、十七名の参加者が聴講されました。歴史を重ねて時代が変化しても、変わらぬ信仰の有難さを改めて一同が再確認致しました。

参拝者の御報告

九月十三日



日蓮宗イタリア蓮光寺住職・タラビーニ上人(写真中央)が当山へお参りになり、御生御影尊へ法味言上されました。ご遠方より誠にご苦労様です

十月八日 徳島県宗務所参拝団ご一行(長崎一隆所長)二十二名の教師・檀徒が参拝されました。本堂にて御生身影尊の御開帳、並びに日興上人の御廟を参拝されました。



徳島県宗務所 参拝団の皆様方

護山志納金の報告

本年度、塔中末寺寺院様におかれましては護山志納金をお納め頂き厚く感謝申し上げます。左記にご寺院名を掲載し、ご報告申し上げます 令和六年度分 市内北山 本妙寺様

総受付 一新!

これまで座って受付をしなければならなかった総受付窓口を、立ちながらできるカウンター式に変更致しました。また内側には事務机を配置しました。役課上人有志より御寄進を頂き誠に御礼申し上げます。



新寂回向事務局より

御本堂におきまして、各御霊位の御回向を申し上げます。

- 宗川寺 故 小澤 政子様
宗川寺 故 勅山 澄子様
宗川寺 故 勅山 博史様
宗川寺 故 勅山 義久様
蓮行坊 故 石川 敦様
久成寺 故 勝又 祥子様
久成寺 故 滝口 昭子様
久成寺 故 清水 正一様
久成寺 故 渡邊 美和様
蓮行坊 故 望月 岑子様
久成寺 故 中川 たつ子様
久成寺 故 滝口 利一様
久成寺 故 土屋 八千代様
九月末日迄 申込み・申請順
ご冥福をお祈り申し上げます

10月の三光池の工事状況



三光池に水を流し始めました 次号11月号にて完成報告を致します

本門寺の主な予定

- 令和六年十月
五日 白糸本源寺入退寺式
八日 徳島県宗務所団参
十日 重須会研修会
十一日 重須婦人会清掃奉仕
十八日 重須婦人会団参
二十五日 檀信徒境内清掃奉仕
重須婦人会清掃奉仕
三輪是法先生勉強会

令和六年十一月

- 十二日 御速夜法要
十三日 宗祖御会式
十八日 千葉県弘法寺 団参
二十一日 本間俊文先生勉強会

丹精者 御芳名

- 献花
市内北山 星谷とみ子様
石橋奉納
市内北山 石川 稔様
海産物奉納
千葉県 中谷雄一郎様
諸堂境内清掃・作業奉仕
本門寺内 重須婦人会様
本山塔中 寺庭婦人様
本門寺内 石川由緒家様
市内北山 望月 正見様
静岡市 紺文シルク様
謹んで御礼申し上げます